

新注國文叢書

東京教育大教授 山岸徳平
國學院大學教授 今泉忠義 編
東京大學講師 吉田精一

奥の細道・去來抄



有 精 堂

新注國文叢書

奥の細道・去來抄

學習院大學教授 岩田九郎校注

(改訂版)

有精堂

例 言

一、本書は、芭蕉の「奥の細道」の全文と、これに「幻住庵記」全文並びに「去來抄」の主要部分とを加えて、新制高等學校・短期大學及び新制大學の教科書として、編さんしたものであります。

一、「奥の細道」は、井筒屋刊行の素龍本の古板本を底本とし、去來本をも参照いたしました。「幻住庵記」は、「猿蓑集」所收のものに據り、「去來抄」は、黃華庵升六所傳の古寫本を底本とし、岩波文庫本、俳書大系本等を參酌して本文を定めました。

一、「奥の細道」は、便宜上見出しの題目を設けました。また各篇とも、教科書としての性質上、原文のすがたを重んじながら、誤記・脱字・省記を補訂し、文字遣・假名遣・送假名・句讀・漢字と假名の配合等を、適當に改訂した點があります。

一、頭註は固有名詞を主とし、また故事出典をあげ、難解の語句には註解を加えておきました。教授の際、板書の補助にしていただきたいと思います。

一、本文の理解を助けるために、地図や寫眞を挿入しました。これは校注者の實地踏査の際に得たもので、また校注者自ら撮影したものもあります。

一、本書で特に新しく試みたことは、各編、各章節にわたつて、「研究」の項を設け、問題をあげて、その節の要點を把握することに、便宜を與えようとしたことであります。幸いに教授者各位に於て、適當にこれを活用されることを、切望してやまない次第であります。

目次

解説

奥の細道

一、漂泊の思ひ	三
二、離別	四
三、室の八島	六
四、日光山	七
五、那須野	九
六、雲岸寺	二
七、殺生石・蘆野の里	三
八、白河の關	三
九、須賀川の驛	四
一〇、文字摺の石	五
一一、佐藤庄司が舊跡	七
一二、飯塚の宿	六
一三、笠島はいづこ	元

一四、武隈の松	三〇
一五、仙臺	三一
一六、つぼの石ぶみ	三
一七、塩釜	五
一八、松島	五
一九、石の巻	五
二〇、平泉	四〇
二一、出羽の國越え	四二
二二、尾花澤	四四
二三、立石寺	四五
二四、大石田	四六
二五、最上川	四七
二六、羽黒山	四八

三、月山	三、山中の温泉
二、酒田の湊	三、曾良の別れ
元、象潟	三、全昌寺
三、越後路	元、越前の國へ
三、市振の宿	四、福井
三、加賀の國へ	四、敦賀の津
三、金澤	四、種の濱
二、太田の神社	四、旅の終り
三、那谷寺	

幻住庵の記……………七

去來抄

修行教……………一五

先師評……………六
同門評……………一三

新注 奥の細道・去來抄

解 說

一

奥の細道は、俳人松尾芭蕉が奥羽地方を旅した紀行であつて、簡潔清雅な文章と、風流閑寂な心境とを以て、わが國の紀行文で、稀に見る優れた作品である。

元祿二年（一六八九年）三月二十七日、芭蕉は深川の草庵を出て、奥州行脚の旅に上つた。同行は愛弟子の曾良であつた。元祿二年といへば、芭蕉は四十六歳であつて、その藝術も漸く圓熟の境に達しようとする時である。この旅が芭蕉の生涯の藝術を更に新しい展開にみちびき、いよいよ完成の域におし進めたことは想像以上である。江戸を出てから奥羽北陸をめぐり、同年九月三日大垣に着き、更に再び伊勢へ向つて出發するまで約五箇月、行程六百餘里の旅であつた。その間、諸國の名勝舊跡をさぐり、歌枕をたすね、興にまかせて詠んだ俳句が五十一句、地方の俳人たちと共につくつた歌仙が二十七卷に及んでいる。文章も俳句も、みな自己の體驗から生み出されたもので、た

だ机上で想像の上に出來た作品でなく、一語一句にその時々作者の實感がにじみ出ていて、力強い力を以て讀む人に迫るものがある。

先頃發見された曾良の「奥の細道隨行日記」と、この「奥の細道」とを比較對照してみると、細かい點に於ては必ずしも一致していない。曾良の記録がすべて正しいとは斷じかねるが、しかし性質上、曾良のは、日々の記録を少しも修飾せず、ありのままに手記していつたものであるから、旅の日々の記録としては、この方が事實に近いと見なければならぬ。そうしてみると芭蕉は、その詩的感興の赴くところは、必ずしも事實にとらわれず、微に入り細にわたつて記述の筆をすゝめ、これに反し、詩情の薄いところは、たとえ時日を多く費したところでも、極めて簡単に片づけているのである。その一例をあげてみると、かの親しらず子しらずの險を過ぎて、市振の宿に泊つた時、偶然にも新潟の遊女と隣り合せの室にねて、その哀れな物語を洩れ聞き、翌朝同行を頼まれてそれを斷つて別れるなど、この紀行中唯一のロマンチックな場面で、一篇に變化と潤いを與えているのであるが、その事は曾良の日記には全く見えていないのである。これらの事實から推して、芭蕉はこの紀行を、ありのままの旅の記録とするのではなく、意識的に文學作品として價值あるものに作りあげようとしたのである。それだけに、文章は洗煉を重ね推敲をつんで、一言半句もぬきさしの出來ないほどに、磨きあげたものになつてゐる。芭蕉は自ら「我が徒の文章は、たしかに作意をたて

て、文字はたとひ漢字を藉るともならぬかに言ひつけ、事は鄙俗に及ぶとも懐しく言ひとるべし」とその文章觀をのべているように、文章に對しても、鋭い良心と精到な用意をもつてのぞんだのでその文章は、高雅幽邃、閑寂清爽の趣を兼ね備えたものが多いが、この「奥の細道」はその代表的なものといふべきであらう。

更に「奥の細道」の文章について細かに考えて見ると、次のような特色を見出すことが出来る。先ず文章が簡潔で餘韻に富んでいることがあげられる。次には一語一句がよく洗煉されていて、みな生々とした彈力をもつている。第三には人と文とが全く渾融して、作者の心境をよく表現している。第四には、巧みに故事や熟語をあやなして、和漢混淆文の妙を極めてゐる。第五には、近松や西鶴の文章に比べて、瀟洒で氣品に富んでいる。これらの點は、殆ど誰でも細道を味讀した人は異論のないことと思うが、今一つ考えられることは、文章の一句一句が、餘韻をのこした省約的な用い方であるに拘らず、文章は頗る流麗で吟誦に値するものがある。この簡潔なものと、流麗なこととの相容れざる二つの特色が、よく調和し玉成している所が、文章として最もすぐれている特色の一つといふことが出来る。

しかし、立場をかえてこの文章を観ると、また多少の缺點と思われる所がないでもない。それは餘りに文章を簡潔にしようとした為に、却つて時として、意味に明瞭を缺く場合があり、またその

好古癖や古典趣味が強く働きすぎて、今少しく忠實な自然描寫を必要と思われる所にも、あたらず故事縁起の記述に終つてゐる所がないではない。また全體としては更に深刻な自然の美を描いてほしいと思ふのであるが、しかし要するにこれらの點は白璧の微瑕ともいふべきもので、この作品の優秀と偉大とに何等の影響を及ぼすものではないのである。

二

「奥の細道」というのは、仙臺から鹽釜に至る道の途中にあつた地名で、この書名も、その地名から思ひついたものであらう。しかし、ただその地名のみによつたのではなく、その名に、奥州地方の細々と續いた道をわけて、旅してゆく意味をも含めて名附けたものと思われるのである。事實芭蕉の旅は、笠を着、草鞋をはいて、一步一步細い道を踏み分けていつたのである。今その行程のあらましをたどつてみると、元禄二年三月二十七日に深川の草庵を出て、舟で千住まで行き、ここから奥州街道を北へ北へと進んでいつた。室の八島を経て日光に參拜し、那須野を横ぎつて黒羽附近の勝をさぐり、殺生石を見、蘆野をすぎて白河の關を越えた。四月二十二日には須賀川に着いて四五日とどまり、歌枕安積山のほとりにかつみをさぐり、鬼の棲んだという黒塚の岩屋を一見して福島にいで、そこから歌に名高い文字摺石をたずねて忍の里に行つた。

五月一日には佐藤庄司の跡を尋ねて、飯坂温泉に泊り、ここで持病が起つて苦しんだが、勇を鼓して伊達郡の大木戸を越え、白石の城下をすぎて岩沼に宿つた。歌名所武隈の松を愛でて仙臺に入り、ここに四五日留まつて附近の名勝をたずね、それから多賀城に壺の碑を見て鹽釜の浦に出た。鹽釜明神に參詣して後、松島に渡り、雄島が磯、瑞巖寺等をめぐつて、更に北に進み、道を踏み違えて石の卷に出た。

石の卷から北の方二十里、一路平泉へと急いで、そこに遺つた數々の史蹟に昔を懷しんだ。平泉から道を南西にとり、陸前羽前の國境を越えて尾花澤に到り、ここから更に南下して山寺の立石寺に詣でた。次いで大石田から舟に乗つて最上川の急流を下り、六月六日羽黒山に登り、月山・湯殿山を順拜して酒田の港に下つた。

酒田から北に進むこと十二里、象潟の勝を探つて再び酒田に戻り、更に越後の海邊を傳つて直江津にで、親しらず子しらずの險を越え那古の浦に達し、道を南西にとつて加賀の國に入り、七月十五日金澤の府に到着した。旅を急いで小松をすぎ、山中温泉に浴して後、腹を病んだ曾良と別れ、淋しい獨り旅をつづけつつ永平寺に賽し、福井にいで、八月十四日には敦賀の港について、其の夜氣比の明神に參詣した。この港から舟を出して、種が濱の景色を賞し、九月三日大垣に入つて門人達の溫い歓迎を受けたが、歡びの情のまだ盡きない九月六日「蛤のふたみに別れゆく秋ぞ」の一句

をのこして、再び伊勢へ旅立つまで、ここに五箇月六百餘里にわたる行程を終つたのである。

三

「奥の細道」の傳本には、いろいろ種類があるが、最も普通に行われており、また最も信頼しうるものは、素龍本である。今ここにはこの事についてやや詳しく説くことにとめておこう。

素龍本というのは、芭蕉が自ら書いた「奥の細道」の稿本を、淺草自性院の住職、素龍に清書させて、題簽は芭蕉自ら「おくのほそ道」と書いて、常に所持していたのを、芭蕉の死後、そのまま板に刻したものである。此の書が出版されるに至つた徑路を簡単に記して見よう。

元祿七年六月、芭蕉が門人去來の家に泊つていた時、話のついでに「奥の細道」のことを話した。

去來は「是非見せて戴き度い」と乞うたが、その時は芭蕉が所持していないで、本は伊賀の兄の許に置いてあつた爲に、去來は見る事が出来なかつた。そのうちに芭蕉は病にかかつて、大阪の客舎で重態に陥つた。去來も急いで駆けつけたところ芭蕉は枕邊に去來を呼んで、「わが病はなかくに重い。おんみは前から『奥の細道』の書寫を望んでいたから、今この本を足下に譲ろう。もし私の命があつて病がよくなつた時は、この本を寫して原本は返してもらいたい。今その本は兄の慰めとして故郷の伊賀に残してあるから、送つてもらふがよからう。」といつた。芭蕉は終にそのまゝ

起つことが出来なかつた。師の歿後、去來は伊賀に書をおくつて「是非お送り戴きたい」と乞うた。兄からは「今はこの書を弟の記念として見て慰んでいるので、しばし手離すということも惜しいのであるが、遺言とあれば致し方がないから、お送りするが、しかし弟の奥の旅のあとと懐しいし、また門人の手蹟も珍らしく見たいから、この本が手許に届いたら、書き寫して、その書寫本を送つてもらいたい。」といつて、本を送つて來たので、去來は早速書き寫して伊賀に送つた。

かくて、芭蕉の遺言によつて、去來の手に入つた素龍の清書本を、京都の書肆井筒屋から出版したのが、即ち素龍本である。その本の書體は、第一圖として挿入してあるので參考されたい。またその素龍本の原本は、跋文によつてみると、書の縦が五寸五分、横が四寸七分、紙數が五十三枚、首尾に白紙が一枚ずつ加わつてゐる。行成紙の表紙をつけ、紫の糸で綴じ、外題は、金をちらした白地の紙に「おくのほそ道」と芭蕉の自筆で書いたものであつた。今、版本になつてゐるものも、全くこの通りに出來てゐる。そしてその形から榊形本と呼ばれてゐるのである。

「奥の細道」の研究書・註釋書については、現今多くの参考書が刊行されてゐるので、それらの記事に譲つて、ここには略することにする。

「幻住庵記」は、芭蕉が奥の細道の旅を終えて後、元禄三年四月、琵琶湖畔の石山の奥にある幻住庵に入り、同年九月ここを出るまでの生活をしるしたもので、その閑居の終り近き日に成つたものである。芭蕉の思想と藝術が最も円熟の境に達した時であり、幽寂な山莊にひとり想いを練つた末に書かれたものであつて、風光明媚な湖畔の眺望、閑寂清淨な旦暮の生活、しみじみと過去を思い人生を想う老境の感懷等が、その洗煉の極致をさめめた筆で描き出されている。まことに俳文の白眉といふべきである。

世に「幻住庵記」と稱するものが三種ある。「芭蕉眞蹟拾遺」「和漢文操」及び「猿蓑集」に載せるものがそれで、前二者はほぼ同様の文であるが、最後のものは相違の點が頗る多い。そうして前二者は文章がやゝ冗漫で風韻に乏しく、他の加筆した疑いもないではないが、後者即ち「猿蓑集」に載せる所のは、根據も十分だし、文章も完備している。前二者は恐らく初案の稿であらう。現在、土居舊子爵家に芭蕉自筆と称せられる一軸が保存されている。この本文は、「猿蓑集」のもと、一二ヶ所文字の異同があるにすぎないもので、完稿を他の人の求めによつて書いたものと思われる。「幻住庵記」の註書は編者の書架に左の如きものがある。

- (一) 七部集大鏡 何丸 (文化六年刊)
- (二) 幻住庵記註 雁來 (文政四年序)(寫本)
- (三) 安詞廼比斗茂渡 護物(文政十年刊)
- (四) 猿蓑逆志抄 空然 (萬延元年刊)

(五) 幻住庵記略註 道舊(年代不詳)(寫本)

(六) 幻住庵記私解 櫻門(年代不詳)(寫本)

右の外に、錦江の「風俗文選通釋」中にもあり、また「俳文評釋」(森無黄)中にもある。右の中で最も詳細なのは「逆志抄」で、出典故事に力を注いでいるのは「安詞廼比斗茂渡」(芦の一本)である。

五

「去來抄」は、芭蕉の高弟、向井去來の遺著であつて、去來が師芭蕉の遺語を細大となく集録し、かつまた同門の人々の俳諧に関する意見を集めたものである。芭蕉は、自己の俳諧に関する意見を、まとまつた著書として遺さなかつたので、それを知るためには、芭蕉が機に臨み折にふれて、門人達に教え示した言葉を集め、これを整理してその全貌を推知するほかはないのである。その意味に於て「去來抄」は、土芳の「三冊子」など、共に、蕉門の俳論を代表するものであり、蕉風藝術の眞髓を知る上に、重要な鍵を與えるものである。

「去來抄」は長く寫本として傳わつたものであるが、去來が世を去つて七十年後の安永四年三月に、尾張の加藤曉臺が、一音に清書させて、京都の井筒屋から出版し、はじめて廣く世に知られたもので、これがいわゆる流布本である。さてこの流布本は、「先師評」「同門評」「修行教」の三部

から成つてゐるが、古い寫本には、この外に「故實」の一篇が加わつて四部になつてゐる、これについては、夏目成美の「隋齋諧話」の中にも、その四卷で完備するものであることを論じてゐる。

第一卷の「先師評」は、芭蕉自身の句並びに門人の句に對して、芭蕉の批評した言葉を集めたもので、それと共に同門の人々の意見もまた集録されてゐる。第二卷の「同門評」には、芭蕉の句及び同門の人々の句に對する蕉門の高足たちの論議した言葉を集めたもので、筆録者たる去來が中心になつてゐることは、當然のことといつてよからう。第三卷の「故實」篇は、去來に對して、甥の卯七が俳諧の法式について質問し、去來がこれに應答した體裁になり、主として蕉門の俳諧の作法・法式について、解説したものである。第四卷の「修行教」は、芭蕉を中心として、その高弟たちが俳諧の本質的な諸問題について論議し、また俳諧修行者の心得についても、種々教示したものである。この卷には不易流行の説、さび・しをり・細みの論、うつり・ひゞき・にほひの附の解などが説かれていて、重要な事項が多くふくまれている。

ここには前にも記した通り、黃華庵升六翁所傳の古本を底本とし、他の二三の善本を參酌して本文とした。そして「故實」を除く他の三卷から、その主要と思われる章を、多く抄出した。

「去來抄」の研究としては、岩波文庫本「去來抄・三冊子・旅寢論」の解説に、潁原博士の評論があり、全本の註釋書としては、昭和十八年に、木島俊太郎氏の「評註去來抄」があり、昭和二十

四年に、岡本明氏の「去來抄評釋」が刊行され、また昭和廿六年末には拙著「去來抄評解」（有精堂）も出た。

かくて「去來抄」が次第に廣く讀まれるようになり、蕉風藝術の眞の姿が、だん／＼と明かになつてゆくことは、まことに喜ばしいことである。